

【 3 】

氏名	入谷仙介 いり たに せん すけ
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第85号
学位授与の日付	昭和48年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	王維研究

論文調査委員 (主査) 教授 小川環樹 教授 入矢義高 教授 佐伯 富

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は唐代の詩人王維(699~761)について、その生涯と思想と文学との全貌を唐代の歴史的情勢に即して考察し、特に彼の詩のもっとも重要なテーマである自然の意義を解明せんとするものである。全文を十五章に分つ。

序章は王維の生まれた則天武后時代を中心とした唐代前期の政治的社会的情勢を、六朝以来の貴族制度の基盤がほりくずされ、宋代以後の士大夫支配が準備されつつあった時期と規定する。この時期に仏教は武後の尊信とあいまって思想的にもきわめて活発であった。

第一章では、王維の出自につき、今の山西省の中小士族であり、仏教信者であった母親崔氏のことから叙述を始める。彼は年少で文官試験に合格し(21歳進士及第と推定)官界に出た。早く15歳ごろより上京し、22歳ごろまで皇族(特に岐王)や大貴族の家に出入し、音楽と詩の才能を愛された(「幼少年時代」)。第二章で、王維が青年のころ多く作ったと考えられる「楽府」の詩につき、その主要なテーマは女性と辺塞つまり愛情と冒険であり、それらは娯楽のために作られた性格をもち、彼の詩の職人性を示すが、一面では彼の青春の心情、はなやかな世界を享樂しながら、実は権力者の愛顧を求めて世を渡らねばならぬ人間の不安から来る複雑な陰影を帯びるといふ(「王維の楽府」)。

22歳(開元8年)皇族圧迫の政策の犠牲となって済州に左遷された以後の数年は、はじめ彼の挫折感が強かった。しかし人間の生き方について思索を深め、隠遁に関心をもち、田園詩の制作も始まる(第三章「済州」)。開元14~22年(726~732)のあいだは、伝記資料の空白があるが、この時期の作詩と推定されるものから、各地の下級官吏として放浪していたとする。この間に妻を失い、以後再婚しなかった。広い視野で自然と人間と政治をながめていた(第四章「放浪時代」)。

開元22年(734)新興士族のチャンピオン張九齡の宰相就任を機会に、王維は期待をかけて接近し、右拾遺に抜擢され、中央にもどった。しかし政治上さして功績をあげず、貴族社会への復帰により美的欲求がふたたび高まった。24年(736)張九齡が李林甫との政争に破れ失脚してから、王維は宮廷と隠棲の二

重生活を志すようになる（第五章「右拾遺」）。開元25年（737）王維は涼州の節度使崔希逸の幕僚となる。仏教の信仰はいよいよ篤く、その形而上性・平等性・幻想性にうちこんだ。長安の都にもどった（739）のち、監察御史として北辺を巡行し、砂漠の中に沈む夕日を見て、強い宗教的体験を味わった（第六章「涼州と開元末年」）。

天宝年間（742～755）に入り、王維の官位は升進し、生活は安定し、宮廷詩人として詩壇の中心であった。彼の「応制」の詩の数々は花やかな玄宗治世の末年を飾ったが、無為・任賢・不戦の主張を盛りこんだところは、彼の政治的理想をすてない抵抗が見られる（第七章「宮廷の人」）。王維は宮廷人としてしだいに栄達したにも拘らず、疎外と不遇の意識になやみ、それをもたらした貴族と士族の対立を認識していた。しかし貴族勢力とたたかおうとする方向には進まず、袋小路に陥った（第八章「王維の不遇感」）。

彼の心の救いとなったのは、まず友情であり、数多くの送別の詩にそれは表現される。官僚の出発を送る儀礼的な作では、視点は背景をなす自然に向けられるにとどまるが、もっと親しい友人に与えた作では、不遇感を訴え、自然に帰る喜びをうたう。そしてついに世の中との別れを純粹に述べ、自己の世界は自然の中にあると宣言した作品にいたる。送別の詩は、二つの道を通して、けっきょく自然詩の世界に入るのである（第九章「送別」）。第十章は「周辺の人々」と題する。送別以外にも、当時の官僚と詩人たちと王維が取りかわした贈答の作は多い。それを親密さの度合によりいくつかの群に分つとき、儲光羲・錢起らは詩風の類似を示すが、盧象・裴迪と実弟王縉・従弟崔興宗の四人が最も親しい小さなグループをなし、仏教の信仰と自然への愛でつながれていたことが知られる。そのうち真に心の友というべきは裴迪であった。

第十一章「王維と仏教」では、彼が士族の立場と貴族社会における境遇との矛盾に悩み、救いを仏教に求めたことを説く。仏教は涅槃の世界を約束し、現実を仮象と見ることを教えた。王維にとっては、儒教的な理想はそのまま実現できなくても、心の平安はえられるのであったことが「与魏居士書」に見える。寺院は美しい自然の中で幻想の世界の如く見えた。もともと自然を美と見る思想は、中国では仏教の信仰と修行の産物であったと言える。王維はこの意識を最も強く有した詩人であった。

かくて中国の自然文学の伝統を造りあげたのは王維である。陶淵明の、田園は自己の主体を守る場だという思想にもとづき、謝靈運と謝朓の客観的叙景の方法を用いて、独自の田園詩を作り、生きた農民を詩の世界に導入した。しかし自然の描写が悲哀と寒冷の感覚を帯びるのは、彼が本質的矛盾を克服しえなかったためであろう（第十二章「自然」）。彼の最高の傑作「輞川集」二十首の連作においては、彼の別荘は神秘の霊境となり、そのまま浄土教の極楽世界へ高められる。しかし彼が長安の貴族社会を逃れて作り出した芸術が、彼をいっそう強く貴族社会に結びつける結果となる（第十三章「輞川」）。

晩年、安祿山の反乱（756）にあい、反乱軍に囚えられ名目上の官職を授けられたことは、救い出され、唐の王朝が中興したのちも、王維の心の深いいたてであった。国家を裏ざったとの意識にさいなまれた彼が肅宗皇帝にたてまつった上表文は、罪のあがないを求めるものであった。特に「責躬薦弟表」は痛烈な自己批判、罪の告白の文として、中国文学史上まれに見るものである（第十四章「晩年の王維」）。

論文審査の結果の要旨

王維の伝記と詩および絵画の研究には、故小林太市郎氏の「王維の生涯と芸術」（昭和19年、大阪）がある。本論文は、王維の画家としての面を除外し、専ら詩と散文の作品により文学者としての王維を論ずるものである。

著者が小林氏の所説に導かれた所は大きいけれども、小林氏の用いたよりもさらに広い範囲の資料の信憑性を一つ一つ吟味し、細部まで詳しい考証でうづめた王維の伝記を新たに組み立てたものを、著者の研究の根幹としている。この点で小林氏よりまさっている。そして王維の詩文の芸術が完成にいたる過程を、いっそう綿密にあとづけ、彼の作品の評価にあたって、同時代の諸家の作と比較するだけでなく、中国文学史の各ジャンルの展望に立って叙述した如き、また著者の造詣の浅からざるを見る。

王維の詩の諸体のうち、「楽府」・「応制」・送別および贈答の諸篇については、おのおの一章を設けて論ぜられる。いずれも精到の論であるが、特に友人との贈答と送別の作から、友人たちのグループを分け、王維に最も親密な四人から成る小さなグループを想定して、このグループが仏教信仰と自然への愛を共通にし、しっかり結びついていることを見いだした。この（第八・第九）二章は、とりわけ創見多く、従来の研究家の考え及ばなかったものを多く含んでいる。

王維の文学の研究において最大の問題は、自然詩すなわち叙景詩にあらわれる自然観の発展であろう。著者は第十二章を「自然」と題し、専らこれを論ずるが、それまでの各章の随処に片鱗は示されている。少年期の王維が「自然に対する特異な非現実的感覚から生ずる独特な美の世界をすでに発見している」（第一章）と言う如きはその一例であり、夕日を好んでうたうことも、濟州にあった22歳以後の青年期の作にすでに見られる（第三章）。また田園に生き働らく人々への強い関心も、彼の自然詩の一つの傾向であった（同上）。次の放浪期（28～36歳）の伝記は資料の空白の時であるが、このあいだに妻を失ったあとの隠棲と仏教信仰の深まりは、彼の自然観をいっそう特色づける（第四章）。そして彼が中央政府の官僚として迎えられたのち、彼が期待していた宰相張九齡の失脚にともない、都を去って涼州の辺地におもむき、節度使の幕中に在ったとき、および監察御史として北方の辺地を巡察したときの経験が、彼の精神生活を異常に高め、彼の自然の風景への観照の態度をきわだったものにする。広大な砂原のかなたに沈みゆく夕日の形象は、このとき最も生き生きと描かれた。彼の叙景詩における自然の美は、仏教、特に浄土の観照と分つべからざるものとなる（第六章）。

彼の自然詩のもう一つの特徴は、陶淵明ふうの主体を守る場としての田園の思想があって（これが隠遁の真の意味である）、そこに謝靈運ら南朝詩人の方法——客観的描写——を加えて成ったことにあると著者は言う（第十二章）。しかし彼の最高の傑作とされる輞川の別荘二十景を詠じた諸編は、単なる写生を超え、現実の景物のうちに浄土の世界をみるものであった（第十三章）。

王維と仏教のかかわりは自然観照の態度だけにとどまらない。彼の散文作品中で最も異色ある「躬を責め弟をすすむる表」などは、反乱軍に身を屈した自己をきびしく責めた罪の告白であるが、皇帝を仏の化身と見なして、罪のあがないを求めたものとするのは著者の創見であり、仏教者としての王維の心の奥底を見きわめた鋭さがある（第十四章）。

このように王維の文学における仏教の意味を、作品の分析を通して明らかにした研究は従来に比を見ない大きな成果である。ただ著者が王維の生きた時代を貴族と士族の階級対立の時期と規定し、彼は士族出身の故に貴族とたたかうべきであったとし、そこから彼の仏教の信仰を単なる規実逃避として斥ける方に傾むきがちで、かえって詩人の人間性を弱めた場合も無しとしない。とは言え、王維の晩年の内面的苦悩は深い共感をもって叙され、充分の説得力をもつ篤実の説と認められる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。